

の事心懸候て承置咎に候。其にては近習相勤させ候て詮なき事と御意に御座候。夫より毎日物價の事を町へ聞かせ候て罷出候得共、よく御見限候哉、其後は御尋も不被成候。御他界以後此人大番頭に成被申、其後隠居候ても毎朝米の直段といわし、豆腐のかすの直段をたづねさせ被申候。子息初め皆不審に被致候得共、少しわけ有之儀とて右の事不被申、其後病死の前日、子息其外の一類中に被申候は、我等此事各不審に可被存候間、申置相果候とて、右の物語被致、只今何の益も無之儀に候得共、其時分心肝に銘じ候て迷惑に存候故、一生忘れ申間敷と存候て如此に候と、語候て果被申候由に候。大猷院様など華麗御好に候様には申候得共、下の事常に御心懸有之事、此一事にて相知申候。格別の儀に御座候。

一、南光坊御祈禱被仰付御答

同御代或時御城中出火と申沙汰有之、夜中の儀に候ゆる其段御寢所へ申上候へば、城中に亂心人有之物と被思召候。御具足上げ候へとて御起被遊候處へ、某の間よりもえ上り只今いづれも消候間、追付鎮り可申旨申上候へば、實の火

災に候へばくるしからぬ儀に候。近く罷成候はゞ重て御知らせ可申上旨被仰候て、又御寢成申由に候。此火災の事如何の儀に候哉、三日前に御存知被成候て、上野の南光坊へ中根壹岐守を以、御祈禱被仰遣候。南光坊、中根に逢候て、是は御請にては無之、其方へ物語に候間、罷歸此段可申上候。只今若君様御誕生の御祈禱仕懸り罷在候。然處又火災の御祈禱と候ては、心と申物二つには用ひがたく、二つに成候ては丹誠こり不申、どれぞ一方をすて不申候ては成不申候。御城幾度火災候ても、御建直被成候へば其分の儀に存候。天下に若君様無之ては安危の所係にて候。二つの輕重を考候へば、火事の御祈禱は手前不罷成候間、知積院へ被仰付候へと被申候由。是も尤成御返答にて候。賢き坊主にて候。英主の御氣に入申も、道理にて候と申事に候。

一、所司代板倉侯父子政談の事

板倉伊賀守殿、多年京都所司代御役儀斷被申候得共、替りに被遣候人無之由にて、御免不被成候。其後江戸へ被參候節、直に被申上候處、台德院様御意に、成程御聞届被成候得共、替りに被仰付候人無之候間、乍大儀可相勤旨に御座

候へば、伊賀守被申候は、大勢御家中の内、私替に被遊候人無之と申儀は有之間敷奉存候。是は御無理に奉存旨被申上候へば、とかく御前の御目き、にては、誰もつとめ可申と被思召候人無之候間、左候はゞ伊賀守目利にて申上候へと候に候。伊賀守被申候は、私儀は常に京都に罷在候故、江戸御家來の人から不存候へば、存當申人無之由被申上候處、其とも可然と存候ものは無之候哉、申上候様に再三上意に候。其時伊賀守被申上候は、左様に御座候はゞ、せがれ周防守大方には相勤可申と奉存候。外に思召當りのもの無之候はゞ、周防守に被仰付候様にと奉存候。密夫の首切申様なる者にては無之候由被申上候へば、此一言いかゞの儀に候哉、見え申候。伊賀守被申候は、御免不被成候。台德院様、それなれば候間とき見候へと申され候。御免不被成候。周防守被申候は、御安堵に被思召候旨にて、伊賀守御暇被下歸京候以後、周防守被仰付、早速上京候て、伊賀守と替り申様との儀に候處、周防守、不存寄儀、中々私の不才にて京都御仕置動申儀可罷成とは不奉存候。大事の御儀に候處、只今御請申上候て以後、仕そこなひ候ては御爲によろしからぬ儀に候間、御免被下候様被申上候。其時被仰出候は、其方親伊賀

守目利にて、其方可然旨申上候。此上は御斷申上候に不及旨、重て被仰出候へども、周防守、たとひ伊賀守申上候ても、私心に請合不申儀を奉畏候儀は不罷成候間、達て御免被成候様にと被申候て、中々合點不被致候。其時安藤帶刀江戸に相勤候て罷在候。周防守と別て咄し申候故、老中方帶刀を招被申、御自分は周防守と相口に候間、御請申候様御申可有之旨に候。帶刀被申候は、親伊賀守申に付上より再三被仰出候上を、左様に御斷申儀に候へば、我等申候ても中々承引仕べきとは不存候得共、申て見可申旨被申候て、周防守方へ被參候へば、周防守出被申候て何とて被參候哉と被申候へば、帶刀いや別儀も無之候へ共、久敷逢不申、其上頓て紀州へ罷越候故、逢可申と存候て參候とて、緩々咄し被申候。亭主も定て此儀帶刀可被申出と被存、又帶刀も亭主よりいひ出さるゝかと存候て、互に不申出、既に帶刀暇乞して座を立被申候故、周防守こらへ兼ねられ候て、扱此間手前事聞被申候哉と被申候へば、帶刀被申候は、成程聞申候。いかにも其方は京の所司役成申間敷と存候由被申候へば、周防守さては其方も左様に被存候て珍重に候。手